

# ビスマルクとミツキェヴィチ

—— ポズナンの記念碑と記憶 ——

割 田 聖 史

はじめに

1、ポズナンと聖マルチン通り

2、「ヴァルタの護り」—ビスマルク像

① ビスマルクとポーランド人政策

② ポズナンのビスマルク像

3、三つのミツキェヴィチ像

① ミツキェヴィチと像の建立

② ポーランド国民の象徴としてのミツキェヴィチ像

③ 社会主義国家のプロジェクトとしてのミツキェヴィチ像

おわりに

はじめに

ポズナンで鉄道に到着し、徒歩で旧市街へ入るとすぐに、左手に大きなモニュメントが目に入る。アダム・ミツキェヴィチ像である（図1）。この像が建っている広場はミツキェヴィチ広場といい、面している大通りは聖マルチン通りという。

他の多くの都市と同様に、ポズナンにも多くの記念碑がある。それらの記念碑の中でも、最も人目につく場所にあり、強い印象を与えるのが、このミツキェヴィチ像であるといえるだろう。

近年の歴史研究において、記憶と場所をめぐる議論は重要な研究領域の一つとなっている<sup>1</sup>。本稿

---

<sup>1</sup> 日本における動向を簡単に見ておくと、ピエール・ノラ編『記憶の場』（岩波書店、全3巻、2002-2003年）が翻訳されて後、記憶と歴史の関係を問う研究が着目されてきた。ドイツの記憶論に関してはアスマンの著作が日本語に翻訳されている。アライダ・アスマン『想起の空間 文化的記憶の形態と変遷』安川晴基訳（水声社、2007年）、同『記憶のなかの歴史 個人的経験から公的演出へ』磯崎康太郎訳（松籟社、2011年）。また近刊の松本彰『記念碑に刻まれたドイツ 戦争・革命・統一』（東京大学出版会、2012年）は、ドイツの記憶と歴史について参照されるべきである。また、記憶に関する研究は、広い意味における文化史（新しい文化史）の中に位置付けることもできる。ピーター・バーク『文化史とは何か 増補改訂版』長谷川貴彦訳（法政大学出版局、2010年）。ポズナンの記念碑に関しては、拙稿が旧市場にあるバンベルカ像を扱っている。拙稿『『失われた地域』— 19世紀ポーゼン（ポズナン）市のバンベル（バンベルガー）をめぐる』伊藤定良、平田雅博編『近代ヨーロッパを読み解く—帝国・国民国家・地域』（ミネルヴァ書



図1 アダム・ミツキェヴィチ像（ポズナン、ミツキェヴィチ広場）（2012年9月著者撮影）

は、現在のアダム・ミツキェヴィチ像とその像が建っている場所から出発して、ポズナンの記憶と歴史の一端を検討する試論である。以下では、1でポズナンの歴史の概略と聖マルチン通りの位置づけを行う。この聖マルチン通りの現ミツキェヴィチ広場に関係のある記念碑を扱う。2ではかつてこの場所にあったビスマルク像を、3ではミツキェヴィチ像を見ていく<sup>2</sup>。

## 1、ポズナンと聖マルチン通り

ポーランドは、966年のカトリックへの改宗により、ヨーロッパの歴史の中に姿を現した。この当時の王朝がピヤスト朝であり、10世紀末には、西はオドラ川（オーデル川）、南はカルパティア山脈に至る現在のポーランドに匹敵する領域を支配するに至った。ポズナンはヴァルタ川の中流に位置し、ポーランド西部のヴィエルコポルスカ地方の中心であり、初期の首都であった。

---

房、2008年）。なお、ドイツ-ポーランド間の記憶の場所については、5巻組みの Hahn, Hans Henning/ Traba, Robert, *Deutsch-Polnische Erinnerungsorte* (Paderborn, 2012-) の刊行が開始された。現在は、Bd.3 Parallelen のみが既刊。

<sup>2</sup> ポズナンの記念碑については、*Kronika Miasta Poznania*（以下、*KMP* と略）2001-2, *Pomniki* が個別の記念碑についての論考を所収している。また、Jaworski, Rudolf/ Molik, Witold (Hg.), *Denkmäler in Kiel und Posen. Parallelen und Kontraste* (Kiel, 2002) は、キールとポズナンの記念碑の比較研究であるが、ポズナンの記念碑に関する論考は、前掲書における論考とほぼ同一の内容である。同じ論考の場合、本稿では、引用のページ数は後者を示す。

ポズナンは、986年に司教座が置かれた教会都市であると同時に、城塞都市としても発展し、10世紀のポーランド王の勢力拡大のための重要な拠点であった。ヴァルタ側右岸近くにオストルフ・トゥムスキ（Ostrów Tumski）という島があり、そこに10世紀後半城砦とそれに付随して防壁を施した城外区が築かれ、その城外区に司教座聖堂が置かれた。この周辺からポズナン市の都市空間が形成されていく。

12世紀にポーランドの封建的分裂状態期、ポズナンはポズナン侯国の中心となった。他方、西方からはドイツ人の東方植民が行われており、ポズナンでも1251年に最初の入植が行われて以来多くのドイツ人を受け入れた。この13世紀半ば以来、ヴァルタ側左岸に従来とは異なる都市空間が建設され、その市域内には1253年に「ドイツ法（マグデブルク法）」に基づいた新しい法制度が適用された。この際、都市に対して高権を持つ君主が改革の「特許状」を発布した<sup>3</sup>。この際に築かれた都市が後のポズナンの中心となった。これが現在の旧市場にあたる地域である。

14世紀にはポーランドと西欧の間の通商路に変化が現れ、ポズナンはポーランドの貿易中心地としても発展し、16、17世紀を通じて交易で栄えた。この間、宗教改革の影響などで、ドイツからの亡命者が増えていった。16世紀には、人口30,000人を数えたという。

18世紀初頭の北方戦争により、ポズナンを含めたヴィエルコポルスカ地方は大きな被害をこうむった。さらに、1709年にはペストが流行により大きく人口が減少した。

この状況を改善するために、18世紀半ばには、ポーランドの国政改革と結びついて、公序良俗委員会による改革の試みがなされた。しかし、この改革はポーランド分割による国家の消滅のために頓挫し、近代化はプロイセン期になされることとなる。

1793年の第二回ポーランド分割により、ポズナンはプロイセン領となった。その後、1797年に市周辺地域が市域に編入され、市域が拡大した。本稿で扱う聖マルチン通りを含む近郊集落は、この1797年に市域に編入された地域である。

その後、ポズナンは、1806年にワルシャワ公国に、1815年に再びプロイセンに編入された。そして、プロイセン支配下でのポズナンは、1828年から要塞化が行われ、1864年に公式的に要塞が完成した。この要塞の壁が市の境となった。この領域が現在の旧市街（当時は新市街）である。また、19世紀半ばには、鉄道が開通した。聖マルチン通りは、この鉄道の駅と市内を接続する道路であり、市の中心となっていった。

聖マルチン通りを見ておくと、東西に通る全長およそ1.2キロの通りで、現在の目抜き通りであるといえる（図2）。

その名前は、聖マルチン教会に由来している。聖マルチン教会は、1252年にはすでに確認されているポズナン有数の教会である。聖マルチン教会は、聖マルチン通りの東の始点から100メートルほど西に進んだところにある。

聖マルチン通りの西の始点は、現在はロンド・カポニエラである。そこから西に250mほど行くと、現在ではミツキェヴィチ像が立っているミツキェヴィチ広場がある。19世紀後半、この空

<sup>3</sup> 井内敏夫「一三世紀ポーランドの都市改革と『ドイツ法』」山本俊朗編『スラヴ世界とその周辺』（ナウカ、1992年）。

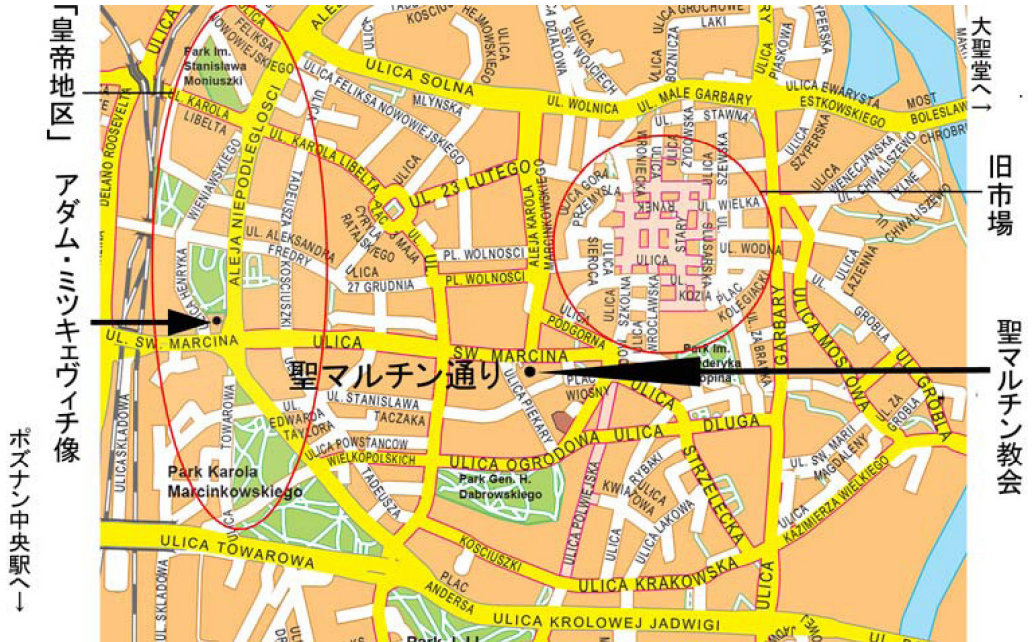


図2 現在のボズナン中心部

間は、ポズナン要塞の壁の一部であり、ベルリン門があった。都市の成長により、1901年にベルリン門とその周辺の壁が解体され、広大な跡地が生じた。その空間に、ドイツ帝国の諸施設が建設された。帝宮、コレギウム・マイウス (Collegium Maius)、コレギウム・ミス (Collegium Minus)、劇場、広場などが設置され、この地域は「皇帝地区 (Dzielnica Cesarska)」と呼ばれるようになった。現在のミツキェヴィチ広場は、この際に設置された広場である。

このように、聖マルチン通りはポズナンの象徴の一つである。ただし、それが象徴しているのは、中世以来続くポズナンというよりも、むしろ、「近代」のポズナン、特に20世紀のポズナンであるといえよう。

## 2、「ヴァルタの護り」ービスマルク像

### ① ビスマルクとポーランド人政策

20世紀初頭の「皇帝地区」の広場に最初に設置されたのは、ミツキェヴィチ像ではなく、ビスマルク像であった。

オットー・フォン・ビスマルク (Otto Eduard Leopold Fürst von Bismarck-Schönhausen, 1815-1898) は、周知のように、1871年に創建されたドイツ帝国の初代宰相 (1862-1890) であり、ドイツ帝国創設の英雄である。そのため、ドイツ人の間に「ビスマルク崇拜」が生まれ、ビスマルク生前である1868年から顕彰のための記念碑が各地で設立され始めた。記念碑の形状はビスマルク塔、ビスマルク柱、ビスマルク像などがあり、総数で700以上、地域的にはドイツだけでなく、アフリ

カや南北アメリカにも広がっている<sup>4</sup>。

ここで、ポズナンにおけるビスマルクの意味を理解するために、ビスマルクの対ポーランド人政策を概観しておきたい。

1871年に創建されたドイツ帝国は、ポーランド人の多く居住するプロイセンの東部諸州をそのままその領域の一部とした。このことから分かるように、この国家は、「ドイツ」という名前を冠してはいるが、単一の国民からなる国家として統合されたものではなかった。そのため、国民統合が主要な課題となったのである。

国民統合の手段の一つとして利用されたのが、「帝国の敵」であった。国民国家ドイツに相容れない社会集団を「敵」と規定し、「負」の記号を持つ「少数派」と位置付け、他方で「帝国の友」という「多数派」を結集しようとするものであり、「負の統合」と呼ばれる。この「帝国の敵」は、第一は南ドイツを中心としたカトリック勢力、第二は社会主義者、第三はポーランド人をはじめとした国民的少数派であった<sup>5</sup>。さらに指摘しておかねばならないのは、これらの「敵」とされた社会集団の中で、独自の結集が行われた。これも「負の統合」と呼ばれている<sup>6</sup>。そのため、「負の統合」という言葉は二重の意味を持つが、少数派の内部における「負の統合」は、国民国家ドイツへの異化作用をもつものであり、少数派は独自の象徴体系・記憶を作り出した。

カトリックに対しては、1870年代に「文化闘争」が展開された。しかし、社会主義者への対抗から、カトリックの政党である中央党や教会への態度を宥和させた。また、社会主義者に対しては、社会主義者鎮圧法が制定されたが、1890年に廃止され、社会民主党が合法化された。こうして、カトリックと社会主義者への抑圧はとりあえずは終結した。

他方で、ポーランド人は、国民的少数派であると同時に、さらに宗派的にはカトリック教徒が多数を占めるという二重の意味での「帝国の敵」であった。また、ポーランド人は、その歴史的経緯からドイツ東部地方に多く居住していた。このため、東部諸州における「文化闘争」は終わることなく、ポーランド人政策の一環として継続された。

ポーランド人政策とは、ポーランド人に対する抑圧を特徴とする。ただし、この政策を見てみると、ビスマルクが政治を主導した1871年から1890年までは強硬的であるのに対して、その後の帝国宰相であるカプリヴィは宥和的であった。また、1900年に宰相となったビューローは「小ビスマルク」と呼ばれ、ポーランド人政策も強硬的であった。このように政策は、跛行的であり、必ずしも一貫していたわけではない。

ポーランド人政策は、大きく分けて、対カトリック教会、「土地闘争」、言語問題の三つの領域として現れた。

---

<sup>4</sup> Seele, Sieglinde, *Lexikon der Bismarck-Denkmäler. Türme, Standbilder, Büsten, Gedenksteine und andere Ehrungen. Eine Bestandsaufnahme in Wort und Bild* (Petersberg, 2005), S.3.

<sup>5</sup> ハンス-ウルリヒ・ヴェーラー『ドイツ帝国 1871-1918年』大野英二、肥前栄一訳（未来社、1983年）、145-150頁。

<sup>6</sup> この概念はもともと社会主義的労働者の独自の結集のために作られた概念であるが、カトリックや国民的少数派にも同様のことが指摘できる。Vgl. Groh, Dieter, *Negative Integration und revolutionärer Attentismus. Die deutsche Sozialdemokratie am Vorabend des Ersten Weltkriegs* (Frankfurt am Main, 1973).

まず、カトリック教会に対する政策を見ておきたい。1872年3月11日の学校監督法は、学校教育における聖職者の監督権を排除し、公・私立学校を国家に従属させ、ポーランド人聖職者の影響力を弱めることを目的としていた<sup>7</sup>。また、1873年の「五月諸法」は、プロイセン全域における聖職資格の国家統制、教会の懲戒権からのローマ教皇の排除、教会の裁判権の制限などを目指したものである<sup>8</sup>。カトリック聖職者の権限を弱めることを目的とした法律は、東部諸州ではカトリック教徒の多いポーランド人に対する抑圧として機能した。さらに、カトリック教会と和解した1880年代にはこれらの諸法は撤回されたにもかかわらず、ポーゼン州では撤回されなかった。このことから見ても、東部諸州においては、対カトリック教会政策が同時にポーランド人政策として機能したといえるだろう。

次に「土地闘争」である。この政策は、ポーランド人地主の土地をドイツ人が買い取り、そこにドイツ人を入植させようとするものである。このための法律が、1886年に施行された「プロイセン植民法」である<sup>9</sup>。この法に基づき、「ヴェストプロイセン・ポーゼン両州でのドイツの要素を強化する」ために、一億マルクの資金が投入され、ポーランド人貴族の所領を購入することとなった。しかし、これは所期の成果を挙げられず、そのてこ入れのために、更なる資金の投入、1904年の「新植民法」制定<sup>10</sup>、1908年の「土地収用法」制定<sup>11</sup>などが実施されたが、結果を得られないまま、第一次世界大戦を迎えることとなる。

最も深刻な闘争を引き起こしたのは、文化や個人の内面の問題と関わる言語の問題である。それが現れた場は多様であり、官庁、学校などで特に顕著であった。言語の領域においてもポーランド人政策は、帝国創設期から始まった。

1872年10月16日に、ポーゼン州上級学校の宗教授業はドイツ語と規定された。また、1873年10月27日のポーゼン州知事通達は、ポーゼン州の全民衆学校児童の授業語をドイツ語とした。ポーランド語は補助語と位置付けられ、宗教と聖歌の授業はポーランド人児童にはポーランド語で行われた。ただし、それらの授業も中・高学年ではドイツ語で行われた。授業科目としてのポーランド語は認められたが、ドイツ語が圧倒的に多かった<sup>12</sup>。

1876年8月28日には、「公用語法」が規定された<sup>13</sup>。この法律は、国家行政、すべての公的機関においてドイツ語を唯一の公認言語とするものである。一部地域におけるポーランド語の使用は一定期間容認されたが、ポーランド人地域における行政のバイリンガル制は撤廃されることとなり、ポーランド語話者は「第二級国民」という位置付けを強いられることとなった。ただし、国家に関わらない公共生活・私生活ではポーランド語は容認されていた。

---

<sup>7</sup> *Gesetzsammlung für die Königlichen Preussischen Staaten* (以下GSと略) 1872, S.183.

<sup>8</sup> GS 1873, S.191-208.

<sup>9</sup> GS 1886, S.131-134.

<sup>10</sup> GS 1904, S.227-234.

<sup>11</sup> *Preussische Gesetzsammulung* 1908, S.29-34.

<sup>12</sup> 伊藤定良『ドイツの長い19世紀—ドイツ人・ポーランド人・ユダヤ人』〔シリーズ民族を問う1〕(青木書店、2002年)、88-92頁。

<sup>13</sup> GS 1875, S.393-394.

学校という場において、軋轢が最高に達したのは、「学校ストライキ」であった<sup>14</sup>。この学校ストライキは、1901年の「ヴレッシェン事件」に端を発する。

1900年、学校教育の正規カリキュラム以外における私的なポーランド語の読み書き授業が禁止された。さらに、民衆学校には中・高学年の宗教授業に再びドイツ語が導入され、学科としてのポーランド語授業も廃止された。個人の内面の問題に国家が介入しようとしたのである。このような状況を背景に、1901年5月20日、教師の言葉のドイツでの復唱と聖書物語の一文の朗読を拒否した三人の少女が、教師から籐の鞭で打たれた。これが、「ヴレッシェン事件」と呼ばれる地域の学校ストライキへ発展した。

その後、1906年の復活祭の際、ポーゼン州でドイツ語による宗教授業が実施されていなかった203校に対して、導入が強行された。これに対し、1906年10月14日に大司教スタブレフスキが母語による宗教教育の重要性を訴えた教書を発したことを契機に、州全域で学校ストライキが起こり、10月下旬から11月中旬に最高潮に達し、その後一年余り継続した。このストライキには、総計1,600校以上、93,000人の児童が参加した。

このように、20世紀初頭は、ポーランド人に対する政府の抑圧が最も激化していた時期であるといえよう。これに対して、ポーランド人も抵抗し、独自の結集が図られたことで、国民意識は一層強化されることとなった。

ドイツ東部諸州は、政府の側から見ると、ポーランド人政策の対象地域であった。この政策の結果、ドイツ人とポーランド人の「民族対立」が惹起されたのである。帝国創設からの20年間、この政策の主導したのがビスマルクであった。そのため、ビスマルクはポーランド人から見た場合、抑圧者以外の何者でもなかったのである。

## ② ポズナンのビスマルク像

1890年にビスマルクが退陣した後、ドイツ帝国宰相、プロイセン首相の座に着いたのは、レオ・フォン・カプリヴィであった。カプリヴィのポーランド人政策は、ビスマルクの抑圧政策を転換し、ポーランド人への一定の譲歩をする「宥和政策」であった<sup>15</sup>。カプリヴィの政策に反対して、1890年にナショナリスト団体の全ドイツ連盟が成立した。1893年にエルンスト・ハッセ (Ernst Hasse) が会長となった。このハッセの下で、全ドイツ連盟は、ナショナリスト団体としての性格をいっそう強めることとなった<sup>16</sup>。

全ドイツ連盟は当然東部国境地域にも関心を持っていた。そこで、1894年5月27日、ハッセは、全ドイツ連盟会長名で、ポーゼン州出身の3人の大土地所有者に秘密書簡を送り、その中で「スラヴの脅威」に対する組織設立を勧めた<sup>17</sup>。その3人とは、4D銀行の一つであるディスコント・ゲゼ

---

<sup>14</sup> 伊藤定良「ドイツ第二帝政期におけるポーランド人問題」油井大三郎他『世紀転換期の世界 帝国主義支配の重層構造』（未来社、1989年）参照。

<sup>15</sup> 伊藤『ドイツの長い19世紀』、159-160頁。

<sup>16</sup> 伊藤『ドイツの長い19世紀』、170-178頁。

<sup>17</sup> 伊藤『ドイツの長い19世紀』、181頁。

ルシャフト創立者の息子フェルディント・フォン・ハンゼマン (Ferdinand von Hansemann)、反ポーランドアジテーターとして知られていたケンネマン (Hermann Kennemann)、そして創設時から17年間会長を務めることになるティーデマン (Heinrich von Tiedemann) である。

彼らは、ポーゼン州とヴェストプロイセン州の住民に対して「ビスマルク詣で」を募り、9月16日、ポーゼン州から1,700人がビスマルクの屋敷があるボンメルンのファルツィーンに赴いた。ビスマルクは聴衆を前に1時間にわたる演説を行い、カプリヴィとポーランド人を批判し、参加者たちに「プロイセンとドイツの統合のための戦い」をかつてと同様に呼びかけた。参加者は歓声を上げ、「ドイツの女性、ドイツの忠誠 (Deutsche Frauen, deutsche Treue)」を歌った<sup>18</sup>。

さらに、9月23日、ヴェストプロイセン州から1,750人の「愛国者」、そのうちの250人が女性、がファルツィーンへ行進した。その際、「ラインの護り (Die Wacht am Rhein)」のメロディーに乗せて、「東方の護り (Die Ostwacht)」が歌われた<sup>19</sup>。ビスマルクは再び演説を行い、ポーランド国家独立に反対した。その演説の終わりは、以下のような印象的な文言で結ばれた。「われわれは、確固として『ラインの護り』を歌っている。しかし、ヴァルタとヴァイクセルの護りはより一層しっかりと立っている。われわれは一片たりともその地を失うことは出来ないのだ」<sup>20</sup>。

この行動に力を得て、11月3日にポズナンにおいて、ドイツ民族促進協会 (Verein zur Förderung des Deutschtums in den Ostmarken) が創設された。協会の目的は、「ドイツナショナルな感情を高揚・強化し、ドイツ人住民の増加と経済的な強化によって、ポーランド人と入り混じっている帝国のオストマルクにおけるドイツ民族の強化と結集」であり、また、「ドイツ人のための協会であって、ポーランド人に対抗するためのものではない」とした<sup>21</sup>。しかし実際には、協会の目的は明らかに反ポーランド人であった。その後、1899年にドイツ民族促進協会は、ドイツオストマルク協会 (Deutscher Ostmarkenverein) と改称した (以下、協会と略)。協会は、創設時の中心的指導者である3人のそれぞれの頭文字から、反対派からHKT協会、ハカティストと呼ばれた。

1900年はじめに、ポズナン住民の一部がビスマルクの記念碑の計画を立て、それをオストマルク協会が支援した。協会がその機関誌において寄付を募ったところ、1900年9月半ばまでに、42,000ライヒスマルク (以下、RM) が集まった<sup>22</sup>。

これに応じて、オストマルク協会の指導者および州・都市の代表者からなる記念碑建設のための委員会が設立された。委員会は、ポズナン市長ヴィッティング (Richard Witting) によって示された建設候補地の中から、要塞の取り壊しが予定されていた聖マルチン通りのベルリン門の前の広場

<sup>18</sup> Galos, Adam, Der Deutsche Ostmarkenverein von 1894 bis 1900, in: Galos, Adam/ Gentzen, Felix-Heinrich/ Jakóbczyk, Witold, *Die Hakatisten. Deutsche Ostmarkenverein (1894-1934). Ein Beitrag zur Geschichte der Ostpolitik des deutschen Imperialismus* (Berlin, 1966), S.37.

<sup>19</sup> Galos, S.39-40.

<sup>20</sup> Molik, Witold, »Die Wacht am Warthe«. Das Bismarck-Denkmal in Posen (1903-1919), in: Jaworski/Molik (Hg.), *Denkmäler in Kiel und Posen*, S.108. ポーランド語は、Molik, Witold, „Straż nad Wartą“. *Pomnik Bismarcka w Poznaniu (1903-1913)*, in: *KMP 2001-2 Pomniki*.

<sup>21</sup> Grabowski, Sabine, *Deutscher und polnischer Nationalismus. Der Deutsche Ostmarken-Verein und die polnische Straż 1894-1914* (Marburg, 1998), S.65.

<sup>22</sup> Molik, S.108-109.





図3 ビスマルク像（1903年）([http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/c/c2/Bismarck\\_pomnik\\_Poznan.jpg](http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/c/c2/Bismarck_pomnik_Poznan.jpg))

を選択した。しかし、この土地の所有者は軍であり、その償却のために1,200万RMが必要となった。この資金は国庫から支出され、114ヘクタールの土地は国有化され、そこに記念碑が設置されることとなったのである。このことから明らかなように、ビスマルク記念碑は、都市からの要求だけではなく、むしろ国家的な見地から建立されたのである<sup>23</sup>。

ビスマルク像は、エーベルライン（Gustav Eberlein）により、1901年12月ベルリンで製作された。オストマルク協会は、この像は「多くの小市民」による寄付でできたため、ドイツ人全体の作品であり、「偉大な宰相への崇拝と感謝」を表しているとした。寄付を行ったのは、金額ではユンカー層の寄与が大きかったが、人数的には官吏、教員、法曹関係者、軍人、医師が多かった。そのため、ビスマルク像は、大地所有者および教養市民層によって担われたといえるだろう。また地域的に見ると、寄付者は、ポーゼン州や東部諸州だけでなく、ドイツ帝国全体に広がっていた<sup>24</sup>。

ビスマルク像の除幕式は、1903年10月11日の日曜日に行われた。ポズナン市住民には、国旗を掲揚するように求められた。特別列車も仕立てられ、多数の市外住民も除幕式に参加した<sup>25</sup>。

ポズナンのビスマルク像（図3）は、樫の切り株の上に広げられたポーゼン州の地図の上に右手を置いていた。この身振りにより、訪れる人は、ポズナンが「ドイツの都市」であり、ポーゼン州はプロイセン君主国から分かつことができないと感じさせられた。また、この土台部分は、「ビス

<sup>23</sup> Molik, S.109-110.

<sup>24</sup> Molik, S.110-111.

<sup>25</sup> Molik, S.112.



図4 ビスマルク像（1915年、奥に見えるのは、コレギウム・ミヌス。当時の王立アカデミー、現在のアダム・ミツケヴィチ大学）（著者所蔵の絵葉書）

マルク」と「1903」という銘が刻まれただけの質素なものであったが、エーベルラインは、土台とビスマルク像について、「(像)はその土台に根付いており、モニュメント全体もその場所に根付いている」と述べ、その土地との結びつきを強調した<sup>26</sup>。つまり、ポズナンのビスマルク像は、ドイツ帝国にポーゼン州を結び付けておくという重要な機能を持っていたのである。

この建設に明確に反対していたのはポーランド人であった。ビスマルク像によって、都市の美化を図るという計画には、1901年10月時点において既に、フワポフスキ (Antoni Chłapowski) が市参事会において、「ポーランド人への直接的な挑発となる」として明確に反対した<sup>27</sup>。住民の多数を占めるポーランド人のこのような反対にもかかわらず、ビスマルク像は建設されたのである。

その後、ビスマルク像周辺の開発が進み、1905年から1910年の間に大型の建築物、特に像の左側には帝宮、さらに右側には王立アカデミーの建設が予定された。この結果、ビスマルク像の効果が薄まることが予測された。そのため、「宰相の姿をより中心に動かすため」に、1907年12月、ビスマルク像は、もともとの立地場所から南西方向に移動された (図4)<sup>28</sup>。

オストマルクイデオロギーを象徴する「鉄血宰相」の記念碑は、ポズナンの町目抜き通りの脇のきわめて目に付く場所にあり、それを見る人には二様の感情を引き起こした。ドイツ人の大部分には崇拜、ポーランド人には怒りや憤りである<sup>29</sup>。それだけでなく、ポーランド人には同時に、対

<sup>26</sup> Molik, S.116.

<sup>27</sup> Molik, S.111-112. *Dziennik Poznański*, 1903.11.03 R.45 nr251; 11.04 R.45 nr252; 1903.11.07 R.45 nr255; 11.11 R.45 nr258.

<sup>28</sup> Molik, S.118; Seele, S.314.

<sup>29</sup> Molik, S.118.

抗的な国民的結集も促したのである。

いずれにせよ、19世紀から20世紀の初めにかけて建設されたポズナンの記念碑において、ビスマルク像ほどさまざまな反応を引き起こしたものはないだろう。

第一次世界大戦後、ポズナンは独立を得たポーランドに属することとなった。1918年12月にポズナンでは蜂起が起こり、1919年3月にはポズナン市はドイツの記念碑を撤去することを決議した。そして、最初に撤去されたのが、このビスマルク像であった。

1920年には、ビスマルク像の場所に、キリスト像（Pomnik Najświętszego Serca Pana Jezusa、聖心像）が建設されることが決定された。最終的に1930年12月30日の決定により、ビスマルク像は溶解され、キリスト像の一部となった<sup>30</sup>。このキリスト像は1932年に完成したが、1939年にナチスによって破壊された<sup>31</sup>。

### 3、三つのミツキェヴィチ像

#### ① ミツキェヴィチと像の建立

アダム・ミツキェヴィチ（Adam Bernard Mickiewicz, 1798-1855.11.26）は、日本ではなじみが薄いかもしいないが、ポーランド三大詩人の一人とされるロマン主義詩人であり、ポーランド文学史上最も著名な人物である。そのため、ミツキェヴィチの記念碑は、ポーランドの各地、ウクライナ、ベラルーシといったかつてのポーランド王国の領域に建てられている。

ミツキェヴィチは、11月蜂起への参加のために1831年にヴィエルコポルスカに半年滞在した。その後、クリミア戦争でロシアに対して戦うポーランド人部隊を支援するために、コンスタンティノープルに赴きそこで客死した。このように、ミツキェヴィチは詩人としてだけでなく、愛国的な活動家としての側面も強く持っていた。

ポズナンにおいて、ミツキェヴィチの死は非常に悼まれた。それは、故郷のリトアニア以外で、短い期間ではあっても、ミツキェヴィチを迎え入れることのできたポーランドの唯一の地域であったためである。それだけでなく、多くのポズナン人にとって、ミツキェヴィチの死は、国民生活における偉大な個人の喪失だけでなく、個人的な知人の死であったのである<sup>32</sup>。

追悼の式は、ポズナンの医師であるテオフィル・マテツキ（Teofil Matecki）によって発案され、暫定的な委員会が作られた。この委員会は、知人からなる小グループで構成され、政治生活の著名な個人、ポーゼン州を代表するような貴族や聖職者はいなかった<sup>33</sup>。

追悼式には、多くの人々が集まり、寄付金も寄せられた。そのうち562ターラーが残金となり、

---

<sup>30</sup> Molik, S.123

<sup>31</sup> Seele, S.315.

<sup>32</sup> Matusik, Przemysław, Die Posener Adam-Mickiewicz-Denkmal : 1856-1998, in : Jaworski/Molik (Hg.), *Denkmäler in Kiel und Posen*, S.180. ポーランド語は、Matusik, Przemysław, *Poznańskie pomniki Adama Mickiewicza*, in : *KMP 2001-2 Pomniki*.

<sup>33</sup> Matusik, S.181.

これを元にミツケヴィチ像を制作することが計画され、設立委員会が成立した<sup>34</sup>。

製作者として選ばれたのは、パリ在住のヴワディスワフ・オレシュチンスキ (Władysław Oleszczyński) であった。記念碑の製作者は、本質的にはポーランド人という狭い範囲に限定される必要はなかったが、ミツケヴィチの記念碑の場合、最も偉大なポーランドの詩人の像は、ポーランド人芸術家によって作られることが必要であるとみなされていた<sup>35</sup>。さらに、オレシュチンスキの場合は、芸術家としての名声だけでなく、ミツケヴィチをよく知っており、その姿に忠実な像を作ることが可能と考えられたのである<sup>36</sup>。

ミツケヴィチ像は、1857年6月に完成し、8月9日に鉄道でポズナンに運ばれた<sup>37</sup>。ここで、委員会は記念碑の設置場所を決定しなければならなくなった<sup>38</sup>。

当時のポズナンには、記念碑を建てられるような公共の広場はほとんどなかった。さらに、ポーゼン州長官プットカマー (Eugen von Puttkamer) や警察長官ベーレンシュプルング (Edmund Bärensprung) は、全ポーランドの熱い崇拝を享受するこの詩人の像のために市の土地を提供することはなかった。そこで、委員会は、聖マルチン教会の司祭であるマクシミリアン・カミンスキ (Maksymilian Kamiński) が委員会のメンバーであったことから、像を聖マルチン教会協の中庭に設置することとした<sup>39</sup>。この土地は、教会の私的な土地であり、さらにかつて墓地であった場所であることから、あまり人目につく場所ではなかった。

しかし、この場所への建立に対しても当局は許可を与えなかった。これに対して、マテツキをはじめとして委員会は抗議した。その抗議において、マテツキは、ミツケヴィチの詩才の偉大さを強調した一方、その活動家としての性格の言及は最小限にとどめた。さらに、オレシュチンスキ作の像の高い芸術性と、都市の美化にとっての重要性を強調した。1858年3月14日、プットカマーは建設を最終的に許可しなかった<sup>40</sup>。ミツケヴィチの政治的な潜在力が危険視されたのである。

この問題は、プロイセン下院に持ち込まれた。1858年4月13日に議員ヴワディスワフ・ベントコフスキ (Władysław Bentkowski) が、この問題に関する演説を行った。この演説において、ベントコフスキは、ミツケヴィチの詩人としての才能とオレシュチンスキの作品の美的価値を強調し、この像が公共の広場や通りといった場所ではなく、人目につかず「特別な扇動的な荘厳さもない」聖マルチン協会の墓地の広場に建てられたとしても大きな問題とならないとした。州当局は、「公共の場所に抵抗の象徴の建設禁止」を含む刑法93条に抵触すると主張するが、この像が「抵抗の象徴」たりえないことを訴えた。(議会では、93条に抵触することが述べられた際、笑いが起こった)。

さらに、ベントコフスキは、ミツケヴィチの作品が(ロシア領である)ワルシャワで発行されていることを指摘し、プロイセンではその像が「抵抗の象徴」とされている状況を批判した。しか

<sup>34</sup> Kantecki, Klemens, *Pomnik Adama Mickiewicza* (Poznań, 1883), s.5-6.

<sup>35</sup> Kantecki, s.6-7.

<sup>36</sup> Matusik, S.182.

<sup>37</sup> Kantecki, s.15-16.

<sup>38</sup> Matusik, S.184.

<sup>39</sup> Kantecki, s.18.

<sup>40</sup> Kantecki, s.19.

し、確かに、その像は「抵抗の象徴である。ただ、それは、美しいもの、高貴なもの、高尚なもの、永遠に尽きることのないものによる、臆病さ、低級なもの、憎しみといったものすべてに対するの抵抗である」と訴え、ミツケヴィチを美的・芸術的文脈のみに置き、政治的文脈から切り離れた。ベントコフスキはさらに続け、デンマークの当局がキールやイツェー、グリュックシュタットの墓地の庭園においてシラーやゲーテの像を禁止したならば、いかにドイツの世論が反応するかを問うと、議場からは歓声が上がった<sup>41</sup>。ベントコフスキの演説は他の議員からも支持された。この結果、内相と首相はポーゼン州当局の決定から距離をとることとなった<sup>42</sup>。

最終的に、12月27日設立の新委員会による新たな要求に基づいて、摂政ヴィルヘルムは像の設置を許可した。そして、1859年5月7日に記念碑が除幕された<sup>43</sup>。当初、このポズナンのミツケヴィチ像は特別な崇拜の対象ではなく、その影響は知識人の狭いサークル内に限定されていた。

この状況に変化が現れ始めたのは、1861年であった。当時、ポーランド地域、ポーゼン州においても、多くの国民的デモンストレーションが行われていた。この当時の特徴的形態は、祖国への礼拝と国民歌であった。興味深いことに、ポズナンの民主派は、この形態からさらに踏み出そうとしたことである。10月23日の『ポズナン日報 (Dziennik Poznański)』に、聖マルチン協会協のミツケヴィチ像において、殺害された「王国およびリトアニアにおける同胞」のために十字架をささげる祭典が、すべてのポズナン人に呼びかけられた。この祭典は、10月27日日曜の午後に開催され、十字架を持った行列が町中を回ることが予定された<sup>44</sup>。当局が行列を禁止したため、計画は実現しなかった。ここで注目すべきは、十字架をミツケヴィチ記念碑の脇に置くという計画である。このことは、ミツケヴィチ像は聖マルチン教会協の人目につかない場所に意味を与えたという事実を示している。この場所は、ポーランド国民的な神聖な場所となったのである<sup>45</sup>。

## ② ポーランド国民の象徴としてのミツケヴィチ像

1898年はミツケヴィチの生誕百周年にあたり、ミツケヴィチ像がクラクフとワルシャワにも設立された。他方で、当時、ポズナンを皇帝の居城都市 (Residenzstadt) にするという計画が実行に移されることとなった。その際、新しくできる広場に新しい記念碑 (ビスマルク像もその一つである) を作る事が計画された。この新しい像に比べて、マルチン教会協の石造りのミツケヴィチ像はあまりに質素であり、ポーランド人の後進性の表れと見えてしまうかもしれなかった<sup>46</sup>。そのため、像をブロンズ製にし、場所もマルチン協会に隣接する近くの広場に移すことが計画された。そして、像の周囲を囲む形で欄干が付けられる予定となった (図5)。財政面ではこの計画は、資本家のプレフキェウイチ (Roman Plewkwicz) が中心となって進められた<sup>47</sup>。改築は1904年3月

<sup>41</sup> Kantecki, s.20-23.

<sup>42</sup> Matusik, S.185.

<sup>43</sup> Grot, Zdzisław *Dzieje pomnika Mickiewicza w Poznaniu 1856-1939* (Poznań, 1956), s.34-35.

<sup>44</sup> *Dziennik Poznański* 1861.10.23. nr243

<sup>45</sup> Matusik, S.186.

<sup>46</sup> Matusik, S.186-187.

<sup>47</sup> Grot, s.42-43. Matusik, s.80-82.



図5 聖マルチン教会脇のブロンズのミツケヴィチ像が設置されていた台座と欄干（2012年9月著者撮影）

に始まり、10月に完成した<sup>48</sup>。なお、ミツケヴィチ像そのものは、オレシュチンスキの造形を変えず、材質をブロンズにしただけである<sup>49</sup>。

なお、当初の石像は、ポズナン学術愛好協会（Poznańskie Towarzystwo Przyjaciół Nauk）の建物の中庭に移された。この後、この中庭は、「ポーランド国民思想の集合場所」の役割を果たすこととなった<sup>50</sup>。

1905年11月13日にはミツケヴィチ没後50年の式典が行われ、記念碑は花で飾られた<sup>51</sup>。ただし、この段階ではミツケヴィチ崇拜は、大きく巻き起こることはなかった。

この状況が変化したのが、1912年11月29日の11月蜂起の記念日の祝祭であった。マルチン協会でのミサの後、人々はミツケヴィチ像の前に集まり、国民歌を歌って平和裏に帰宅した<sup>52</sup>。この違法ではあるが平和的なデモは、ポーランド人の新しい闘争形態だけでなく、ミツケヴィチ像に対する新しい解釈をも示していた。つまり、ミツケヴィチとその像は、従来は、ミツケヴィチと直接結びついた文脈においての意味を持っていたのであるが、いまや普遍的な国民的シンボルとなり、ポーランド愛国主義と同義となったのである。また、ミツケヴィチ像はポズナンにおいて、たった一つのポーランドを示す公の記念碑であった。この記憶の場所の限定、さらには記念碑の周囲の柵とそれによるそこに集うことのできる人数の限界は、プロイセンにおけるポーランド国民生活の抑圧の象徴ともなったのである<sup>53</sup>。

翌1913年1月には、1863年の1月蜂起の50年記念の祭典が行われた。その後、ミツケヴィ

<sup>48</sup> Grot, s.44.

<sup>49</sup> Grot, s.45.

<sup>50</sup> Matusik, s.187.

<sup>51</sup> Grot, s47.

<sup>52</sup> Grot, s48.

<sup>53</sup> Matusik, S.188.

チ像の前には、警察による見張りが常時行われることとなった。その結果、7月に行われた祭典において、像に花を飾ろうとした人々と警察との争いから逮捕者も出た<sup>54</sup>。ミツケヴィチ像前のデモンストレーションは、第一次大戦の末期の1917年のポズナンにおけるコシューシコ蜂起の大祝典、および、1918年のプレス＝リトフスク条約に関するデモの際にも行われた<sup>55</sup>。

このように、1910年代には、このミツケヴィチ像は、ポーランド国民の全体を示す象徴となったのである。

ポーランドの独立は、第一次大戦後実現した。ミツケヴィチ像はもはや抵抗のシンボルではなく、都市の一部となった。しかし、1939年9月、ナチスドイツによってポズナンは占領され、ミツケヴィチ像は1940年4月21日に撤去された<sup>56</sup>。

### ③ 社会主義国家のプロジェクトとしてのミツケヴィチ像

ナチスドイツの占領からの解放の際、ポズナンは旧市街全体の破壊という大きな代償を支払った。そのため、新しい都市当局は、都市の再建という大きな課題を負った。この時期に新しいミツケヴィチ像が議論となった。

まず1948年に、1848年革命百周年と結びつけ、像を建立する計画が提出され、コンクールが行われたが、この時点では結局実現しなかった<sup>57</sup>。その後も議論が行われ、再びコンクールが行われ、1955年12月にポズナンの芸術家ヴイトヴィチ（Bazyli Wójtowicz）の作品が選ばれた。しかし、この決定に対しても反対があがった<sup>58</sup>。

まもなく、1956年6月のポズナン暴動が起り、さらに、スターリン期の政治システムの危機により、社会の関心は他へ向かった。記念碑の問題は、1956年秋に新しい政治状況の中で再び取り上げられた。1957年はじめには、記念碑建設委員会が、新しい建設地（現在のミツケヴィチ広場）を決定した。この設置場所の理由のひとつは、1956年6月28日のポズナン暴動を連想させる広場の性格を変化させることであった<sup>59</sup>。

ヴイトヴィチ作のミツケヴィチ像は、1958年5月29日に除幕された（図6）。しかし、この式典は、かつての聖マルチン協会の記念碑ほど住民に感動を与えなかった。このことは、必要な資金が寄付では僅か6.5%しか集まらず、残りは国庫から支出されたことにも現れている<sup>60</sup>。

図6を図4と比較すると分かるように、かつてピスマルク像が占めていた場所を、ミツケヴィチ像が閉めている。この点から見て、このミツケヴィチ像は、かつてのドイツの象徴に完全に取って代わったといえる。

同時に、このミツケヴィチ像は設立の経緯から見ると、ポズナンの住民の側からのイニシアチ

---

<sup>54</sup> Grot, s.48-59.

<sup>55</sup> Matusik, S.189.

<sup>56</sup> Matusik, S.189.

<sup>57</sup> Matusik, S.189-190.

<sup>58</sup> Matusik, S.191-192.

<sup>59</sup> Matusik, S.193-194.

<sup>60</sup> Matusik, S.194.



図6 アダム・ミツキェヴィチ像（ポズナン、ミツキェヴィチ広場）（2012年9月著者撮影）

ヴによるものではなく、国家の意図によって設置されたものである。つまり、この像は、かつてのミツキェヴィチ像とは違い、ポーランド民衆ではなく、ポーランド国家の側に大きく寄与するはずのものであったといえるだろう。現在私たちが目にするのは、このミツキェヴィチ像である。

## おわりに

聖マルチン通りは、ポズナンの「近代」を象徴する場所であった。その聖マルチン通りの西の入り口にある広場は、ポズナンの顔ともいえる場所である。

その場所に最初に建てられたのは、1903年のビスマルク像であった。ビスマルクは、ドイツの象徴であると同時に、ポーランドにとっては憎悪の対象であった。そのような対象が市の最も目立つ場所に置かれたのである。

他方、ポーランド人にとっての記念碑は、詩人のミツキェヴィチ像であった。初代のミツキェヴィチ像は、ポズナンのポーランド人エリートによって聖マルチン教会脇の人目のつかないところに建てられた。そのため、ポーランド人一般を引き付けるものではなく、その影響は限定的であった。しかし、1904年に造形は同じだがブロンズとなった像は、ビスマルク像をはじめとしたドイツ人の記念碑に対抗的に作られたものであった。この像は、ポーランド人大衆をもひきつけ、ポーランドナショナリズムの象徴となり、その性格を国民化・大衆化したのである。

聖マルチン通りには、西端にビスマルク像、東端にミツキェヴィチ像と、ドイツとポーランドの相互に対抗する象徴が屹立していたのである。このことは20世紀初頭のポズナンを象徴しているといえよう。

二つの大戦を経て成立した社会主義ポーランドにおいて、聖マルチン通りのかつてビスマルク像があった広場には、新しいミツキェヴィチ像が作られた。この広場は、1956年のポズナン暴動を





図7 アダム・ミツケヴィチ像（ポズナン学術愛好協会中庭）（2012年9月著者撮影）

象徴する場所であった。新しいミツケヴィチ像は、この記憶を打ち消すために、国家によって計画されたものであった。つまり、ミツケヴィチ像は、国家によって篡奪されたといえるだろう。

しかし現在、このミツケヴィチ広場には、もう一つの記念碑が建っている。「ポズナンの十字架（1956年6月（暴動）の犠牲者記念碑）」である。この記念碑は、社会主義国家に対する反体制運動を記念するものである。この点でも、聖マルチン通りとミツケヴィチ広場は、ポズナンの近代、特に20世紀を象徴する場所なのである。

最後に指摘しなければならないことは、現在ポズナンにはミツケヴィチ像がもう一つあるということである。それは、オレシュチンスキ作の初代の像のレプリカであり、ポズナン学問愛好協会の建物の中庭にある。1989年の体制転換の後、学問愛好協会の主導によって再建された。先に述べたように、ブロンズの二代目の像が作られた後に、オレシュチンスキ作のオリジナルの石像が設置されていたのがこの場所であった。このレプリカは、1998年12月2日、ミツケヴィチ生誕200周年の日に除幕式が行われた<sup>61</sup>。ポズナンのエリートの記憶は今もこの場所に立っているのである（図7）。

ビスマルク像と三つのミツケヴィチ像の検討から見えたのは、ポズナンにおける記憶の多層性と多様性である。ビスマルク像とミツケヴィチ像は、それぞれドイツ人とポーランド人の記憶を象徴しており、ナショナルな記憶による差異が現れていた。また、ミツケヴィチ像は、ポーランド人の中においても、知識エリート、大衆、社会主義国家のそれぞれにおいて異なる記憶の中で機能していた。そして、さらに、現在そして今後も記憶のあり方は変化し続けていくと考えられる。これらの多様な記憶を分析することが今後の課題である。

<sup>61</sup> Matusik, S.195.

# Bismarck and Mickiewicz

— Memories and Monuments of the City of Poznań —

WARITA Satoshi

A visitor to present day Poznań would see the Mickiewicz monument at the Mickiewicz square which is situated at the westernmost end of St. Marcin Street. However, a century before, a visitor would have seen a Bismarck monument standing in the same place. Today, Poznań is a city in Poland. However, in the 19th century it was a part of the German Empire. This paper examines the historical memories of the city of Poznań by investigating the Bismarck and the Mickiewicz monuments.

In chapter 1, the formation of St. Marcin street and the present Mickiewicz square is surveyed. At the end of the 18th century, the surrounding areas of St. Marcin were incorporated into the city region. The circumference of the Mickiewicz Square was developed in the era of German Emperor Wilhelm II, and called the “emperor district”. For these reasons, St. Marcin Street and the Mickiewicz Square symbolize “modernized” Poznań rather than the traditional medieval Poznań.

In chapter 2, we survey the Bismarck monument. As is well known, Bismarck was a hero of the founding of the German Empire. On the other hand, he was an oppressor for the Poles. In spite of opposition from the Polish population, the Bismarck monument was built in 1903 at the “emperor district” which was developed then, in order to show the power of Germany.

In chapter 3, we consider the Mickiewicz monuments. Adam Mickiewicz was one of the greatest Polish national poets and writers, and died in 1855. The first Mickiewicz monument of Poznań was built in 1858, which is the earliest one dedicated to him in Poland. This stood at the side of St. Martin’s church. This monument was built by intellectuals that were intimate with Mickiewicz. That meant that the importance of this monument was restricted to intellectual circles.

In 1904, this monument was reconstructed. The purpose of this reconstruction was to confront with new German monuments within the city, including the Bismarck monument. As a result, this second monument became a symbol for Polish nationalism. This monument was destroyed on the occasion of the Nazi occupation in 1939.

In 1958, the present monument was built at the site where the Bismarck monument once

stood. This square was one of the main open places of the Poznań uprising in 1956. In order to divert this memory, this monument was erected at the initiative of the socialist state. This later monument to Mickiewicz represented an appropriation of the monument of the Polish people by the socialist state.

This survey of the Bismarck and Mickiewicz monuments of Poznań shows that the national respective memories of Germans and Poles were different. Furthermore, the fact is confirmed that even amongst the 'Poles,' memories of the elite, the people, and the state differed from each other.